

## 特集

### 特産果樹生産動態等調査からみた品種の動向について

農林水産省 生産局 園芸作物課 田中 啓介

#### 特集

・特産果樹生産動態等調査からみた品種の動向について

p1

#### 中央果実協会からのお知らせ

・省力樹形等新たな果樹生産技術に関する調査結果について

p3

・平成29年度果物の消費に関する調査報告書

p5

・りんごに関する機能性表示食品について

p7

#### 業務日誌

p8

#### 人事異動

p8

#### 【はじめに】

我が国の果樹農業は、多様な気候の下、東日本を中心としたりんごに代表される落葉果樹、西南暖地を中心としたかんきつ類を始めとした常緑果樹など、地域の特性に応じて、全国津々浦々で多様な果樹が栽培されています。

農林水産省では、都道府県において生産される多様な果樹について、品目、品種及び系統ごとの栽培面積(以下「面積」という。)、収穫量、出荷量等の推移を明らかにし、産地の育成、近代的な生産出荷体制の確立、消費ニーズを踏まえた果実の安定供給及び消費者への情報提供等、産地の状況

に応じたきめ細かな果樹行政を推進していく上で必要な基礎的資料を得ることを目的に特産果樹生産動態等調査を行っています。

本稿では、平成30年2月20日に公表された本調査の結果から面積が大きいうんしゅうみかん、りんご、また、品種の転換が特徴的なぶどう(生食用)の3品目について、調査が始まった平成13年産から平成27年産までの面積上位品種、作付が増加している品種のうち代表的な品種の動向を紹介します。

#### 【うんしゅうみかんの品種の動向について】

図1にはうんしゅうみかんの品種別の面積の推移を示しています。面積が上位の品種「宮川早生」、「青島温州」、「興津早生」の面積については、順位に変動はないものの、平

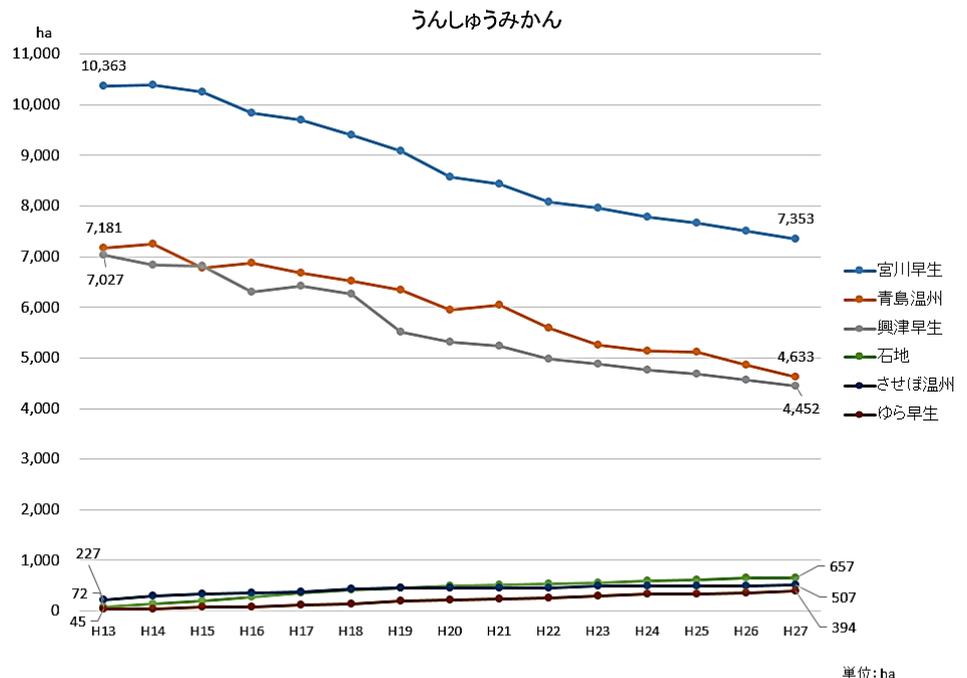


図1. うんしゅうみかんの品種別栽培面積の推移

果物を食べて  
応援しよう!

被災地を応援

成13年産から平成27年産までにそれぞれ3,010ha(29%減)、2,548ha(35%減)、2,575ha(36%減)の減少と大幅に減っていますが、面積全体に占める割合は47%(H27)と、主力品種となっています。一方、面積が増加している品種では「石地」、「させぼ温州」、「ゆら早生」があり、平成13年産から平成27年産までにそれぞれ585ha(812%増)、281ha(123%増)、349ha(775%増)増加しており、3品種で面積全体の5%(H27)を占めています。それぞれの主な特徴としては、「石地」は糖度が高く浮皮が少ない、「させぼ温州」は糖度が高く食味が良好、「ゆら早生」は極早生の中でも糖度が高いといった点があげられます。また、3品種のほかにも田口早生、北原早生も増加している品種です。また、うんしゅうみかんについては、中晩柑への転換も進んでいます。

【りんごの品種の動向について】

図2にりんごの品種別の面積の推移を示しています。りんごについては、「ふじ」の栽培面積の割合がどの年産においても、りんごの面積全体の約50%を占めています。「ふじ」、「つがる」、「王林」といった上位の品種は平成13年産から平成27年産までに面積をそれぞれ3,955ha(17%減)、1,625ha(26%減)、1,409ha(33%減)減少しています。一方、「シナノスイート」、「シナノゴールド」、「トキ」といった毎年増加を続けている品種もあります。「シナノスイート」と「シナノゴールド」は平成13年産から平成27年産までにそれぞれ942ha(880%増)、664ha(1844%増)増加しています。「トキ」については平成18年産から本調査に報告され、ほぼ毎年面積が増加しており、平成18年産から平成27年産までに348ha(2320%増)と急増しています。これらの3品種で面積全体の6%(H27)を占めています。それぞれの主な特

徴としては「シナノスイート」は多汁で甘みがある、「シナノゴールド」は多汁で高糖度でありながら適度な酸味があり、貯蔵性に優れている、「トキ」は黄色品種の中でも数少ない中生品種、多汁で食味良好といった点があげられます。また「シナノゴールド」、「トキ」などの黄色品種は着色管理作業が不要で省力化が図れるとして、近年注目されています。

【ぶどう(生食用)の品種の動向について】

図3にぶどう(生食用)の品種別の面積の推移を示しています。ぶどうは、新品種への転換が顕著に見られます。「巨峰」、「デラウェア」といった面積が上位の品種はそれぞれ1,857ha(29%減)、1,689ha(41%減)減少しています。しかし、「巨峰」は面積全体の31%(H27)を占める主力品種となっています。一方、「ピオーネ」、「シャインマスカット」、「ナガノパープル」といった面積が年々増加している品種があります。「シャインマスカット」、「ナガノパープル」はそれぞれ平成19年産、平成16年産から本調査に面積が報告され始めた新しい品種です。「ピオーネ」は平成13年産から平成27年産までに567ha(32%増)増加しており、「シャインマスカット」、「ナガノパープル」は報告された年から平成27年産までにそれぞれ990ha(496倍増)、109ha(778%増)増加しています。特に「シャインマスカット」は本調査に報告されて以降、毎年100ha以上増加し続けており、平成26年産からはキャンベルアーリーの面積を抜き、4位まで上昇しており、面積全体に占める割合は7%となっています。それぞれの主な特徴としては、「ピオーネ」は実が大粒で、甘みが強く食味は良好、「シャインマスカット」は黄緑色で実が大粒で糖度が高く、皮ごと食べることができる、「ナガノパープル」は、黒系の品種で実が大粒で食味が良好で、皮ごと食べることができるといった点

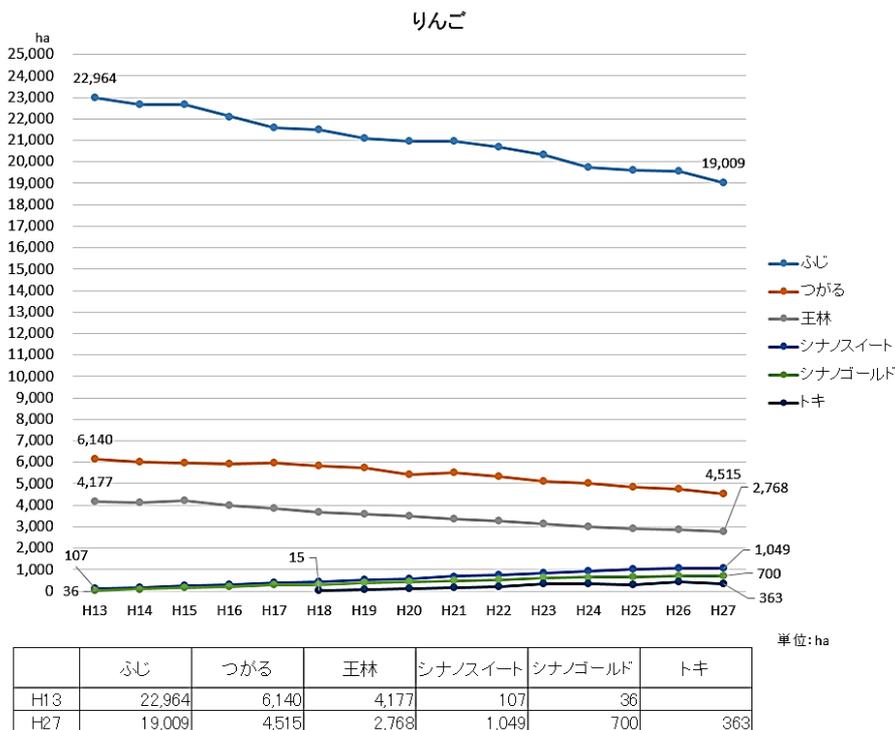


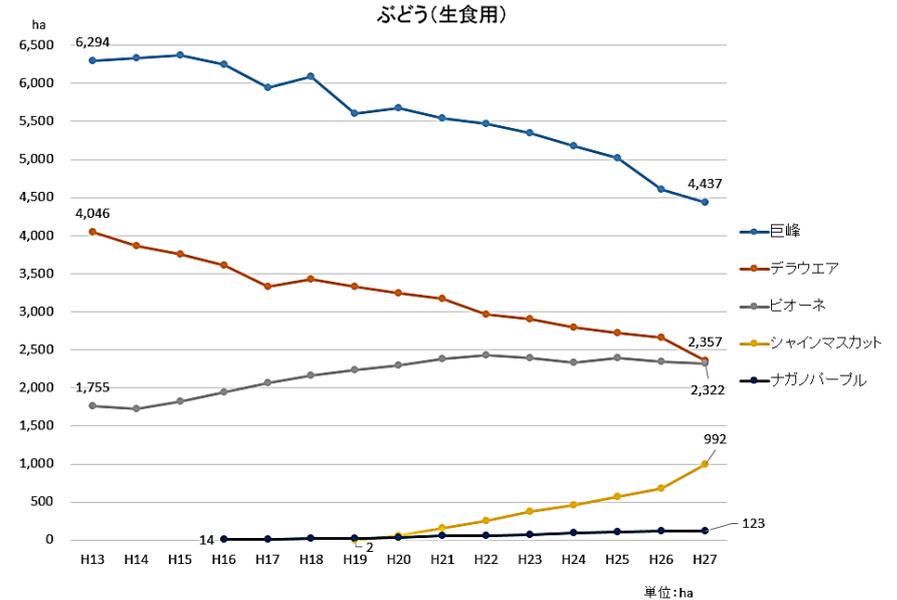
図2. りんごの品種別栽培面積の推移

があげられます。

**【おわりに】**

本稿では、品種の推移を紹介しましたが、品目別では、マンゴー、ブルーベリー等の面積が増加しています。

果樹の面積は農家の高齢化、担い手不足等により年々減少していますが、食味が良好、食べやすい等の消費者ニーズの他に、栽培のしやすさ等の生産者のニーズにあった品種が年々増加を続けています。



	巨峰	デラウエア	ピオーネ	シャインマスカット	ナガノパープル
H13	6,294	4,046	1,755		
H27	4,437	2,357	2,322	992	123

図3. ぶどう(生食用)の品種別栽培面積の推移

中央果実協会会からのお知らせ

省力樹形等新たな果樹生産技術に関する調査結果について—情報部—

今後の省力樹形等導入に向けた支援対策の検討に資するため、果樹産地協議会を対象としたアンケート調査、省力樹形等の新技術を導入した代表的な産地について現地実態調査を行い、省力樹形等の技術の導入実態、技術的な課題、経営上の問題点等を整理しました。詳細は、平成29年度省力樹形等新たな果樹生産技術調査報告書(中央果実協会ホームページ)をご覧ください。

**I アンケート調査(樹種別の省力樹形等の普及面積・設置面積)**

省力技術等普及面積・設置面積、高所作業機の台数等をまとめると表のようになりました。

1) わい化栽培は、りんご(6,916ha)が多く、うんしゅうみかん(124ha)、中晩柑(17.6ha)でも普及が見られます。主な台木は、りんごではM9、JM7等、うんしゅうみかん、中晩柑では「ヒリュウ」です。主幹形(主幹に直接側枝を配置した円柱形の樹形)は、うんしゅう

みかん(6.1ha)、かき(1.0ha)で行われています。垣根仕立ては、加工用ぶどう(191ha)が多く、おうとう(2.5ha)、中晩柑(1.2ha)、うんしゅうみかん(0.6ha)でも行われています。  
 2) 通常立木仕立てされる樹種で棚仕立て(ジョイント栽培除く)が行われているのは、かき(平棚90.0ha、Y字棚0.4ha)、もも(平棚46.6ha、Y字棚2.9ha)、おうとう(平棚4.0ha、Y字棚4.6ha)です。おうとうでは、一部でV字仕立て(1.6ha)も見られます。  
 3) ジョイント栽培は、日本なし(74.1ha)が多く、かき(4.7ha)、もも(0.3ha)、うめ(0.2ha)でも行われています。日本なしでは、ジョイント栽培の他に、一文字仕立て・平行整枝(28.4ha)、むかで整枝(4.5ha)、流線型仕立て(1.4ha)があります。斜立主幹形は、もも(221ha)、おうとう(3.5ha)で、低樹高仕立て(大藤流、大草流等)は、もも(19.2ha)で行われています。ぶどうでは、垣根仕立ての他に、短梢せん定仕立て(1,344ha)、

中梢せん定仕立て(797ha)、マンズレイカット(24.5ha)があります。  
 4) 根域制限栽培(防根(遮根)シート利用、ポット・ボックス栽培等)は、うんしゅうみかん(27.9ha)、日本なし(4.7ha)、ぶどう(4.2ha)、中晩柑(0.6ha)、かき(0.2ha)で行われています。マルチ・マルドリ栽培については、うんしゅうみかんではマルチのみ(2,257ha)、マルチ+灌水設備等(259ha)、中晩柑では、マルチのみ(44.0ha)、マルチ+灌水設備等(47.0ha)です。うんしゅうみかん、中晩柑、りんごでスプリンクラー、灌水チューブ等設備のある面積は、うんしゅうみかん(2,378ha)、中晩柑(1,795ha)、りんご(596ha)です。かんきつ園における作業道(幅1.2m以上)設置圃は、うんしゅうみかん(2,932ha)、中晩柑(1,221ha)です。  
 5) 省力樹形ではありませんが、中晩柑では樹勢を強化するためにユズ等を強勢台木として利用した栽培(0.6ha)も行われています。うめの収穫ネ

表 樹種別の省力樹形・根域制限等の栽培面積、マルチ・マルチ・灌水設備・作業道・うめ収穫ネットの設置面積、高所作業車の台数

省力樹形、マルチ・マルチ等技術	栽培面積・設置面積(ha)、高所作業機台数								
	うんしゅうみかん	中晩柑	りんご	日本なし	もも	うめ	おうとう	ぶどう	かき
わい化栽培	124	17.6	6916 <sup>1)</sup>		0.2				
主幹形	6.1								1.0
垣根仕立て	0.6	1.2					2.5	191 <sup>2)</sup>	
平棚仕立て					46.6		4.0		90.0
Y字(棚)仕立て					2.9		4.6		0.4
V字仕立て							1.6		
ジョイント栽培				74.1 <sup>3)</sup>	0.3	0.2			4.7
一文字仕立て・平行整枝				28.4					
むかで整枝				4.5		0.1			
流線型仕立て				1.4					
斜主幹形仕立て					221		3.5		
低樹高仕立て					19.2				
短梢せん定仕立て								1,344	
中梢せん定仕立て								797	
マンズレイカット								24.5	
根域制限	27.9	0.6		4.7				4.2	0.2
マルチのみ	2,257	44.0							
マルチ+灌水設備等 <sup>4)</sup>	259	47.0							
スプリンクラー、灌水チューブ、灌水設備	2,378	1,795	596 <sup>5)</sup>						
作業道(幅1.2m以上)設置圃	2,932	1,221							
強勢台木利用栽培		0.6							
収穫ネット設置圃						3,707			
高所作業機台数			3,432		1,963		70		77

1)りんごわい化栽培(標準、低樹高、低樹高密植、高樹高高密植、半わい化)の合計

2)加工用ぶどう

3)日本なしジョイント栽培(平棚仕立て、Y字棚仕立て)の合計

4)マルチ+灌水設備等(マルチ+手動灌水設備、マルチ+手動灌水+手動液肥混入設備、マルチ+自動灌水設備、マルチ+自動灌水+自動液肥混入設備)の合計

5)りんごわい化栽培圃の灌水設備

ット利用面積は、3,707ha です。高所作業機は、りんご(3,432台)、もも(1,963台)が多く、かき(77台)、おうとう(70台)でも導入されています。

## II 先進的取組事例と今後導入を予定・検討している技術

1)先進的取組事例として回答があったのは9産地協議会です。主な技術は、フィールドサーバー(うんしゅう

みかん、ぶどう)、灌水情報サイト(うんしゅうみかん)、ジョイント栽培(すもも)です。

2)今後導入を予定・検討している技術について、道府県ごとにその数を見ると、うんしゅうみかん10県、中晩柑8県、りんご12道県、日本なし20県、もも7県、うめ4県、おうとう4県、ぶどう12道県、かき10県の産地協議会から回答が得られました。導入を予定している樹種

別の主な技術は、うんしゅうみかん(わい化栽培、主幹形、根域制限、マルチ栽培)、中晩柑(低樹高栽培、わい化栽培)、りんご(高樹高わい化栽培、低樹高密植栽培、半わい化栽培、わい化栽培(標準))、日本なし(ジョイント栽培、根圏制御栽培、一文字仕立て・平行整枝)、もも(低樹高仕立て、棚仕立て)、おうとう(Y字棚仕立て、平棚仕立て)、ぶ

どう(短梢せん定仕立て、新短梢栽培)、かき(ジョイント栽培、平棚仕立て、低樹高栽培)です。

### Ⅲ 現地実態調査からうかがえる省力樹形等の効果と課題

樹種別に主要な省力等技術について現地調査を行い、その効果と課題について整理しました。

#### うんしゅうみかん

1) わい化栽培: 低樹高化による省力化・高品質化が期待されています。樹形維持・連年安定生産の技術確立が必要です。

2) 主幹形: 樹形がコンパクトで管理しやすい。根量が少ない品種では、収量が不安定になりやすく、連年安定生産に向けた対応が必要です。

3) マルドリ栽培: 高品質化だけでなく、連年結実・収量増の効果もあります。初期投資がかかりますが、短期間で回収が可能です。

#### りんご

1) わい化栽培: 果実品質の揃いがよくなります。収量が多くなるため、収穫量あたりの労働時間は削減されます。しかし、樹勢の強いわい性台木を用いた場合は、樹をコンパクトに維持するためには年2回の摘心(夏季せん定)は必須となります。また、高密度栽培の場合は、年2回程度下垂誘引する必要があります。密植であるため、トレリスや苗木代のコストが高く、灌水設備や高所作業機も必要です。

2) 半わい化栽培: 収量が多く、収穫量あたりの労働時間は削減されます。特に新しい技術を必要とせず、導入コストもそれほどかからないため、灌水設備のない地域や傾斜地でも比較的導入しやすい技術です。

#### ぶどう

1) 新短梢栽培: 長梢栽培と比較してせん定作業時間が短く、通常の短梢

栽培と比べても、主幹の位置が棚面より低く、新梢管理や果房管理がしやすい。果房管理、収穫作業も肩、腕や首への負担が少ない技術です。品種別の最適な総主枝長や台木の選定が課題です。

#### 日本なし

1) ジョイント栽培: 早期成園化が可能(4年で成園)であり、樹形が単純であることから導線が直線的で省力・軽労化効果が高い。苗木本数が多く必要で、大苗育苗、接ぎ木等の手間がかかります。

2) 日本なし盛土式根圏制御栽培: 早期成園化で多収となり、品質も安定します。資材、水源確保(井戸)、灌水装置等初期投資が大きく、灌水装置のメンテナンスも必要です。

#### かき

1) 平棚栽培: 台風被害が少なく受光状態が均一で、収量・品質が安定します。脚立を使用することなく作業できますが、主枝上面から枝が発生しやすいため、新梢管理に時間を要します。全般的には立木栽培より省力・軽労化となりますが、棚の資材費が高いこと、棚下作業の肩、腕や首の負担がかなり大きいことが課題です。

2) ジョイント栽培: 脚立が不要となり目の高さで着果管理ができること、整枝・せん定作業が容易で、樹高が低く農薬散布量を減らすことができます(導入3年目で収量・品質の評価は未着手)。導入経費は平棚栽培よりは少ないが、多くの苗木が必要で、大苗の育苗、接ぎ木等の手間がかかります。

#### もも

Y字棚栽培: 収量は慣行と同程度またはやや増収します。糖度、玉ぞろいがよく商品化率が高い。資材費等初期投資が大きく樹形作りに手間がかかります。完成後は、収穫、結実管

理、樹体管理の省力・軽労化が可能です。高所作業機を使うことにより、収穫・結実管理を省力・軽量化している事例もあります。

#### おうとう

1) Y字棚栽培: 収量は、慣行と同程度ですが、商品化率が上昇し、廃棄率も減少します。夏季せん定を中心とし、冬季せん定は切り返し程度とするため、せん定作業は省力化が可能です。また、結実面が平面的で作業動線が直線的となるため、摘果、収穫、新梢管理等の省力化が可能です。内側の枝の管理がしにくい、雨よけ・棚設置の初期投資が大きく、樹形完成までの枝の誘引等に手間がかかるという課題があります。

2) 垣根栽培: 慣行栽培に比べ樹数が多い分、単収が増加するとともに、商品化率が上昇し、廃棄率も減少します。夏季せん定を中心とし、冬季せん定は切り返し程度とするため、せん定作業は省力化が可能です。結実面が平面的で作業動線が直線的となるため、摘果、収穫、新梢管理等の省力化が可能です。雨よけ・棚設置の初期投資が大きく、樹形完成までの枝の誘引等に手間がかかります。高所作業機により両側の作業が可能です。収穫や枝管理が効率的にできます。

#### 樹種共通の課題

省力樹形等技術を導入する上での全般的な課題として、トレリスや棚等の資材、多数の苗木、灌水設備等の経費負担が大きいためにあげられます。中山間地果樹園では、鳥獣害対策のための経費負担が大きいために課題です。機械化・自動化を進めるためには、作業道の整備、平坦地への移転等を重点的に進める必要があります。

## 平成29年度果物の消費に関する調査結果報告書 - 需要促進部 -

中央果実協会が20歳以上を対象として毎年度行っている「果物の消費に関する調査」の結果からは、消費者は果物の消費をもっと増やしたいという意向があることがうかが

えるものの、こうした意向が実際の購買行動につながっていないのが現状です。一方、単身世帯や夫婦のみの世帯の増加、世帯員数の減少などの世帯構成の変化、食

の外部化の進行など果物の消費を取り巻く社会経済情勢が大きく変化しており、今後、果物の消費拡大を図っていくためには、消費者ニーズの変化に的確に対応した商品提供や販売方法等の工夫が必要です。

このため、29年度においては、経年で調査を行っている果物の摂取状況、摂取意向・意識及び「毎日くだもの200グラム運動」の周知状況等について調査を行い、前回(28年度又は27年度)との比較分析を行うとともに、カットフルーツ、スムージー、フレッシュジュース等近年増加している果物の新たな摂取方法やβ-クリプトキサンチン等機能性成分表示等に対する消費者の意識について調査を行いました。ここでは調査結果の一部を紹介しますが、紹介できなかった興味深いデータが多数掲載されている調査報告書は当協会のホームページの調査資料の欄に掲載されていますので、ぜひご覧ください。

### ○ 調査対象者等

平成22年度国政調査の調査対象都道府県ごとの人口構成比に合わせて性別・年齢別に割付を行い、全国の満20歳以上70歳未満の男女2,000人を無作為抽出して、インターネット調査を実施しました。なお、本調査の対象とした果物には、いちご、すいか、メロンを含んでいます。

### 1 男性、若者を中心に果物の消費は低迷基調

果物をほぼ毎日摂取している人は22%で、28年度から5ポイント低下しました。男女別では女性が26%と男性を8ポイント上回っています。年代別には60代では40%と非常に高く、逆に20代では11%と際だって低い結果となっています。

一方、1日平均の摂取量については、200g以上摂取している人の割合は全体では13%で27年度よりも4ポイント少なくなりました。摂取量別には50g～150g未満が全体の約6割を占めています。男女別では、摂取頻度とは逆に男性の15%が毎日200g以上摂取できており、女性を4ポイント上回っています。

1日の摂取量が現状程度である理由については、他に食べる食品があるからという回答が全体の44%に上っており、僅かな差で一度にそんなに量を食べられないから、値段が高く食費に余裕がないからという回答が続きました。

### 2 果物摂取頻度の低い層では果物加工品の消費が拡大基調

どのような食べ方なら今までより多く果物を食べられるかという問いには、カットフルーツを選択した人が41%と最も多く、果汁(100%ジュース)が40%と続いています。毎日果物を食べない理由の中で3番目に多かった回答が「皮をむくなど手間が掛かる」なので、このような手軽に食べられる方法を選択した人が多いということと整合しています。

生鮮果物と果物加工品の摂取を比較すると、全体では67%が生鮮果物主体としていますが、女性よりも男性

が、また若い年齢層ほど生鮮主体の割合が低くなっています。また、果物加工品の摂取頻度については、週3日以上食べるとした人が全体の21%に上っており、27年度よりも9ポイント増加しました。年齢が若い層ほど加工品の摂取頻度が高く、20代では24%が果物加工品を週3日以上摂取しています。

### 3 4割以上の人果物の摂取を増やしたいと回答

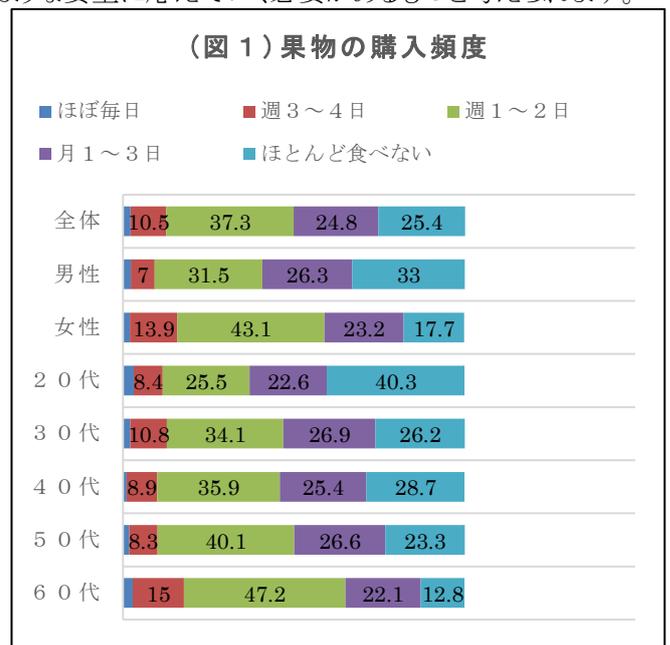
今後の果物の摂取意向については、特に変えようとは思わないと答えた人が過半数を占めました。増やしたいとした人も43%に上りました。この傾向は27年度調査結果とほぼ同じですが、特に女性では増やしたいとした人の割合が48%と男性を9ポイント上回っており、中でも年齢が若い層ほど増やしたいとした人の割合が高くなっています。

果物の消費を増やすための販売方法については、袋売りではなくバラ売りや少数個入りでの販売とした人が最も多く、次いで店頭で試食ができる販売、コンビニエンスストアでの販売という順になっています。特に女性では小ロット売りが、20代ではコンビニでの販売が多くなっています。提供方法については、多少外観は悪くても割安な果物と、皮がむきやすい、種が無いなど簡単に食べられるものが約40%に上りました。

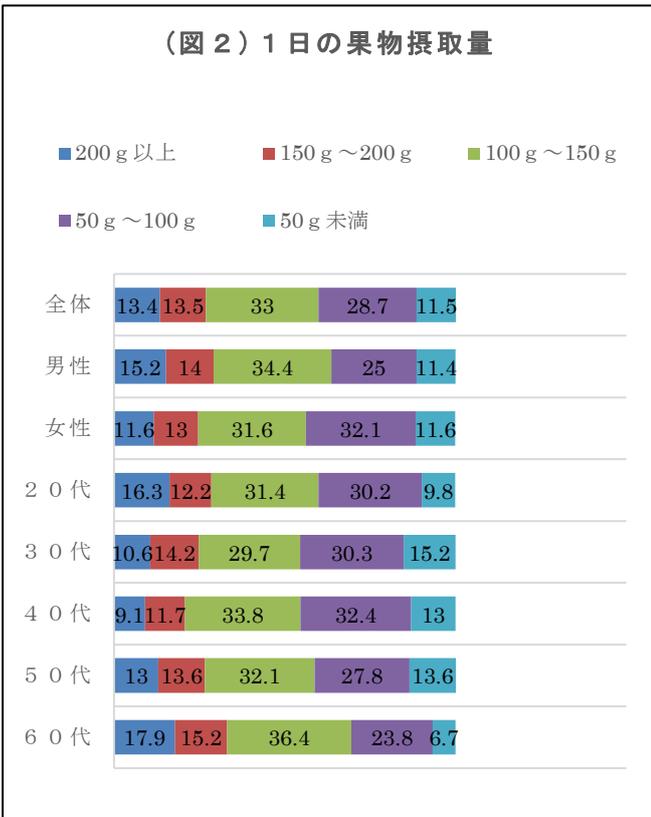
### 4 調査結果を振り返って

果物をほぼ毎日摂取している人の割合は28年度から5ポイント低下しており、男性を中心に果物の摂取動向は低迷基調にあります。一方で、果物加工品については男性や若い年齢層といった生鮮果物の摂取が少ない層で相対的に購入が多いことから、これらの階層における果物の消費拡大の突破口として期待できるのではないかと考えられます。

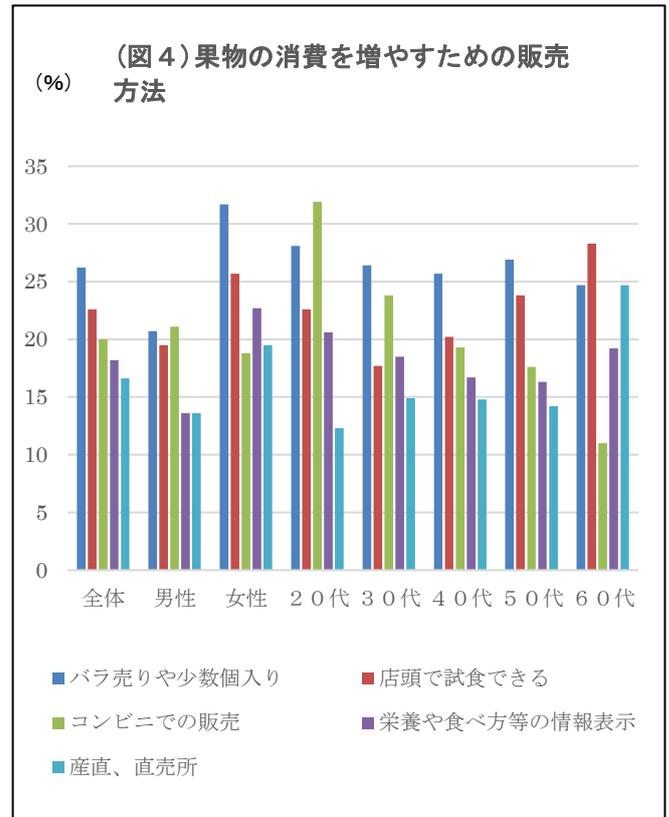
今後、果物の消費を拡大するためには、皮ごと食べられる、種が無いなど手間が掛からない品種の開発・普及と併せ、小ロット販売、コンビニでの提供を望む声が多く、このような要望に応じていく必要があるものと考えられます。



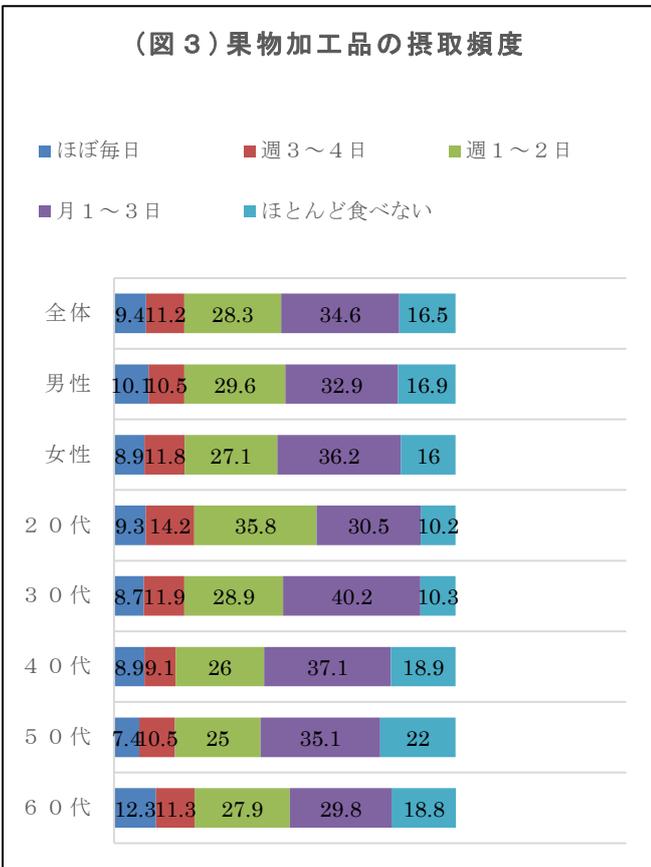
(図2) 1日の果物摂取量



(図4) 果物の消費を増やすための販売方法



(図3) 果物加工品の摂取頻度



### りんごに関する機能性表示食品について

平成30年3月7日にJAつがる弘前の「プライムアップル！（ふじ）」が機能性表示食品として消費者庁に届出、受理されました。関係する機能性成分と機能性については「本品にはりんご由来プロシアニジンが含まれます。りんご由来プロシアニジンには、内臓脂肪を減らす機能があることが報告されています。」、また一日当たりの摂取目安量は「1日当たり1個（可食部300g）を目安に、そのままお召し上がりください。」と表記されます。

機能性表示食品は、平成27年4月より始まった新しい制度で、果物などの生鮮農産物にもその科学的根拠を示せば事業者の責任で機能性表示が可能になりました。すでに、みかんではβ-クリプトキサンチンが骨の健康に役立つとして、生鮮食品（6農協）の他、ジュース等の加工食品でも届出・受理されています（5月15日現在）。

本表示制度を活用することで、消費者に対して果物の機能性に対する正しい知識をより広く伝えられるようになり、今後の果物の消費拡大につながるものと期待されます。

**(公財)中央果実協会**

編集・発行所  
 公益財団法人 中央果実協会  
 〒107-0052  
 東京都港区赤坂 1-9-13  
 三会堂ビル 2F  
 電話：03-3586-1381  
 FAX：03-5570-1852

編集・発行人  
 今井 良伸  
 印刷・製本  
 (有) 曙光印刷



当協会 Web サイト  
 URL:  
[www.japanfruit.jp](http://www.japanfruit.jp)

**お知らせ**

毎日くだもの200グラム運動  
 メールマガジン「くだもの&健康  
 ニュース」を発行しています。

多くの方の読者登録をお待ち  
 しております。

メルマガの読者登録方法は  
 当協会下記ホームページをご  
 覧下さい。

<http://www.japanfruit.jp>

**業務日誌**

- 30. 3. 20 平成29年度臨時評議員会（書面決議）
- 30. 4. 26 平成30年度全国果実生産出荷安定協議会かんきつ部会（於 大田市場）
- 30. 5. 7 平成30年度第1回理事会（書面決議）
- 30. 5. 8 平成30年度全国果実生産出荷安定協議会りんご部会（於 J Aビル）
- 30. 5. 17 労働力に関する調査検討委員会（於 三会堂ビル）  
 果樹経営支援等対策事業実施評価委員会（於 三会堂ビル）
- 30. 5. 18 平成30年度協会公募事業審査委員会（於 三会堂ビル）  
 平成29年度新商品開発等事業公募選考委員会（於 三会堂ビル）
- 30. 5. 22 公募役員候補者選定委員会（於 三会堂ビル）

**人事異動**

**農林水産省生産局園芸作物課**

新	日付	名前	旧
課長補佐（園芸流通加工第1班担当）	30. 4. 1	高井直人	国土交通省北海道開発局旭川建設部農業計画課長
課長補佐（輸出促進班担当）	30. 4. 1	土橋 勝	大臣官房文書課企画官
農林水産技術会議事務局研究専門官兼生産局農産部園芸作物課付	30. 4. 1	高田教臣	農研機構 果樹茶業研究部門品種育成研究領域ナシ・クリ育種ユニット主任研究員
総務班総括係長	30. 4. 1	小池彰汰	大臣官房文書課
総務班庶務係長	30. 4. 1	中島健太	園芸消費促進班消費促進企画係長
園芸流通加工第1班流通改善係長	30. 4. 1	楠岡紗和	高知県稲穂多農業振興センター普及指導員
園芸流通加工第2班加工係長	30. 4. 1	中井博通	近畿農政局生産部生産技術環境課環境直接支払推進係長
園芸消費促進班消費促進企画係長	30. 4. 1	隅本美希子	横浜植物防疫所羽田空港支所庶務課庶務係長
輸出促進班輸出促進係長	30. 4. 1	柴山陽一郎	栃木県農政部経営技術課
輸出促進班国際調整係長	30. 4. 1	棟方将人	大臣官房国際部国際経済課貿易企画班輸入係長
総務班総括係	30. 4. 1	小川正樹	生産局畜産部食肉鶏卵課
園芸生産第2班園芸振興係	30. 4. 1	小野あゆみ	経営局農地政策課
農業環境対策課課長補佐兼生産局農産部園芸作物課付	30. 4. 2	光廣政男	外務省在ブラジル日本国大使館一等書記官

**道県基金協会**

区分	新役職	日付	名前	旧役職
就任	北海道協会事務局長	30. 4. 1	菱川 篤	
退任		30. 3. 31	福田宏彦	北海道協会事務局長
就任	福島県協会事務局長	30. 4. 1	鈴木崇	
退任		30. 3. 31	伊達正文	福島県協会事務局長
就任	愛知県協会事務局長	30. 4. 1	齋藤弥生子	
退任		30. 3. 31	山下和己	愛知県協会事務局長
就任	愛媛県協会事務局長	30. 4. 1	武田孝司	
退任		30. 3. 31	渡部和光	愛媛県協会事務局長
就任	熊本県協会事務局長	30. 4. 1	酒瀬川雅士	
退任		30. 3. 31	田中良典	熊本県協会事務局長

**中央果実協会**

(職員)

区分	新役職	日付	名前	旧役職
退職		30. 3. 31	北島秋吉	総務部長事務取扱
採用	総務部長	30. 4. 1	菅原誠治	元農林水産省大臣官房参事官
採用	臨時嘱託	30. 4. 1	北島秋吉	
退職		30. 4. 30	北島秋吉	臨時嘱託
採用	審議役	30. 5. 1	片山信浩	元農林水産省中国四国農政局生産部長
退職		30. 5. 20	佐野資郎	指導部長
配置換	指導部長	30. 5. 21	片山信浩	審議役